

『煌めきは貴族を陥れる』

著：剛しいら

ill：海老原由里

食後、ベンジャミンを交えて、スモーキングルームでしばらく話していた。ベンジャミンは大学に入ったばかりで、やたら理想主義的なことばかり口にする。そういう年頃なのだと思って、アーネストは適当にあしらうが、ダニエルは違う。きちんと大人の男として、ベンジャミンに対応していた。

その後、ベンジャミンを下がらせて、アーネストは再びダニエルと対(たい)峙(じ)した。「預かったダイヤモンドは、鑑定に回させてもらった」

それを聞いてダニエルは頷く。

「いいとも。当然だ。安物の水晶で騙されたくはないだろうからな」

ダニエルには余裕がある。ということは、鑑定を待つまでもなく本物なのだろうか。

「父とどこで会ったか、詳しく教えてはくれないだろうか」

「出資を続けてくれるなら……話してもいい。他にも、まあいろいろと……写真とかあるんだ。それもインドにアーネストが同行するなら……渡してもいい」

細巻きの煙草をくゆらせながら、ダニエルは物(もの)憂(う)げな口調で言う。

やはり何か握っていると思っていたら、写真があったのだ。アーネストはここ数年の写真技術の進化ぶりを、恨(うら)みたくなってきた。

「写真か……どんな写真か知らないが、そんなもので私を脅(おそ)すつもりなのか？ 悪いが脅(おそ)されたくらいで、インドになぞ同行する気はないんだが」

アーネストは煙草を吸わない。紳士達がディナーの後、スモーキングルームで紫(し)煙(えん)をくゆらせている中、いつも酒か紅茶を飲んでいるだけだ。

その理由はたった一つ、白い歯を守るためだった。

「脅(おそ)してるんじゃない。あくまでも紳士的に話しているつもりなんだけどな。俺(おれ)があ(あ)の写真(しやうしん)を公開(こうかい)したら……名門貴族(めいもんきざう)モーム侯爵(こうさく)の名誉(めいよ)はすべて失(し)つ墜(つい)する。俺(おれ)はな……アーネスト。侯爵(こうさく)の名誉(めいよ)を守(まも)ってや(や)ったんだぞ」

「いったい父(ちち)が何(なに)をした(し)って言う(い)んだ。そんな正体(せいだい)も分(わ)からない話(わ)ばかりして混(ま)乱(らん)させていないで、はっきりと言(い)ってくれ」

いつまで話しても、ダニエルは本当(ほんとう)のことを言(い)わない。これではなかなか先(ま)に進(すす)みそうになかった。

「次にインド行(い)きの船(ふね)が出る(で)るまで一週(いっしゅう)間(かん)だ。その間(かん)に、アーネスト。どうする(し)か決(き)めてくれ。写真(しやうしん)を見(み)せて金(かね)を出(だ)せと言(い)ったら、それは脅(おそ)きょう迫(はく)になる。悪い(わるい)が、俺(おれ)は犯罪者(ざいひんしや)とな(な)って投獄(とうごく)される(さ)るために、イギリス(いギリス)に戻(かえ)った(っ)んじゃない。あくまでも共同事業(きょうどうじぎや)者(しや)でありたい(た)いでね」

このま(ま)ははっきりさせない(せ)つもりなら、訴(う)った(た)える用意(ようい)がある(あ)ると言(い)おうとした(し)た先(ま)に、ダニエル(だにえ)るに言(い)われて(た)しまった(た)。

「いいマナーハウス(まな)だ。さすが(さ)に名門貴族(めいもんきざう)だけ(だけ)のこ(こ)とはあ(あ)る。アーネスト、決(き)心(しん)する(し)まで、俺(おれ)はこ(こ)に(こ)にい(い)させ(せ)てもら(ら)うよ。いいだ(だ)ろ？」

余裕(よゆう)の笑(わ)いを見(み)せられて、アーネスト(あーねすと)はぎゅ(ぎゅ)っと拳(こぶし)を握(にぎ)りしめた(た)。

なぜ、ダニエルは嘔吐きだと、警察に突き出せないのだろうか。こんなふうに関手のペースに巻き込まれ、唯(い)々(い)諾(だく)々(だく)としているのは、アーネストにとってもっとも気に入らないことだった。

「そもそも、何で私がインドに同行しないといけないんだ？」

「そこもまたアーネストには気になるところだ。

「このままいくと、インドでは俺がアーネスト・モームになってしまうからさ」

「えっ？」

「堂々と年下の愛人を連れ歩く分けにはいかないだろ。だから侯爵は、俺を息子として連れ歩いていた。そのまま誤解させておくか？ それも犯罪になりそうで、俺は嫌だな」

「何だって？ どういうことだ」

「ますますアーネストは混乱してくる。けれど愛人として紹介出来ないダニエルを、息子と偽(いつわ)ったというのにはありそうに思えた。

「行けば分かる。まあ、そのまま誤解されていても、俺は別に困らないけどな」

「そんなことは犯罪だ」

「そうだよ、犯罪だ。俺は侯爵のせいで、犯罪者にはなりたくない。だが、インドにおける、モーム家の信用は絶大だ。ぜひ、次代のモーム侯爵にも、採掘現場の視察をしていただき、これが採掘する価値のあるものだと、見せて欲しいんだ」

「つまり……私を利用するのか？」

「そのとおり。実際にアーネストが、石の一つも掘れる訳じゃない。そこまで来たことだけに価値がある」

妙な説得力があるが、アーネストはそこで素直に頷くようなことはしたくない。まずはクレイトンの調査報告を待つべきだろう。

一週間という期限を切られたことで、かえってアーネストにも覚悟が出来た。その間に、この謎めいたダニエルという男の正体を掴(つか)みたい。

「では、一週間、当家での滞在を認めよう。ただし……明日からは来客がある。大(おお)叔(お)母(ぼ)が従妹(いとこ)を連れてくるんだ。紳士らしく振る舞っていただきたいのだが」

それもまた憂(ゆう)鬱(うつ)の種(しゅ)だった。母が亡くなってからは、大叔母が時折やってきて、妹達にレディ教育を施(ほどこ)している。それだけならいいのだが、必ず従妹やその友人のレディを同伴してきた。

その目的は、アーネストの結婚相手として相応しいレディを紹介することなのだ。そんなレディ達まで、ダニエルに関心を持たれたらと思うと気が気ではない。

ダニエルにはどこか人を惹(ひ)きつける、妖しい魅力がある。短時間しか一緒にいないのに、印象は強烈で、いつも冷静なアーネストが混乱させられていた。

この調子でレディ達を翻(ほん)弄(ろう)されたらたまらない。自分の城で、そんな揉(も)め事は許せなかった。

「紳士的にね……レディには手を出すなと、はっきり言ったらどうだ？」

「にやっと笑って、ダニエルはじっとアーネストを見つめた。

「インドに行っている間に、紳士の定義を忘れたわけじゃないだろう？」

「ああ、安心していい。レディには……手を出さない」

そこでダニエルは続く言葉を呑み込むと、意味ありげな視線をアーネストに向けた。

「レディにはな……」

そして含みを持たせた言い方をすると、アーネストの顔面に紫煙をふっと吹きかけてきた。

「そうか、それを聞いて安心した。ここには、老いて正常な判断力の鈍(にぶ)った紳士などいない。狙う獲物がなくて、残念だったなアッカーソン卿」

「そろそろダニエルと普通に名前と呼んでくれ。俺だって、別に老いた男が好みというわけじゃない。若ければ若いほうがいいし、美しければ美しいほどいいに決まってる。そうだろ、くるくる巻き毛のアーネスト。今は綺麗に短くしてしまったんだな」

ダニエルは手を伸ばしてきて、アーネストの髪に触れた。アーネストはずっと体をずらして、その手から逃(のが)れる。するとダニエルの手はさらに追ってきて、アーネストの唇に指が触れた。

悪ふざけでされたキスを思い出し、アーネストは狼狽えてしまい、顔を真っ赤にして抗議した。

「そういう趣味はないんだ、アッカーソン卿。私に手を出したら、決闘を申し込まれる覚悟をしたほうがいい」

真面目にアーネストは言ったつもりだが、ダニエルはいきなり爆笑していた。

「イートン校で、自分がどう呼ばれていたか知らないだろう？ 大理石のアーネストって呼ばれてたんだ」

「何だ、それは……」

「最初は氷だったが、氷ならまだ溶ける可能性がある。アーネストのは生涯、溶けることのない大理石のハートだと言われてたのさ」

ふんっとアーネストは鼻を鳴らす。

愛だの恋だの、夢だのロマンだのと、大騒ぎする連中の気がしれなかった。そんなものは、浮かれたアメリカ人に任せておけばいい。イギリス貴族は、むやみに動じたり、騒いだりしないものだと言われてきた。これまでそれを間違ったと思ったことはない。

「だが、大理石じゃないことに気がついた。アーネストのハートはダイヤモンドだ。キラキラと輝く美しさはこの世で最高のものだが、そのあまりの硬さで、他の石を傷つける」

「最高の賛(さん)辞(じ)をありがとう。そろそろ失礼する。いつまで待っても、君は何も話さないようだからな、話さないのか……話せないのかは謎だが」

アーネストは立ち上がり、本来なら友好的に握手かハグをするところ、軽く黙礼しただけでスモーキングルームを出て行こうとした。

「それでは、ゆっくり休みたまえ、アッカーソン卿」

「ああ、今夜はいい夢が見られそうだ。アーネストの輝きは失われていなかった。それどころか、昔以上に輝いている。そんな君との船旅が、今から楽しみだ」

ダニエルも立ち上がり、煙草を白砂が敷かれた灰皿にねじ込む。

せっかくのお誘いだがと言いかけたが、どうせ不毛なままこの会話も終わると思って、アーネストはそのまま黙って出て行った。

本文 p45～52 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>